

がら、社会史と思想史、文学・日本語史と思想史との間にあった高い垣根を軽々と飛び越えてしまっている。しかも、「経世論の外部」として「超越と詩」をとらえ、六経の儒学体系と徠学派の不遇意識をつなげることで、悩みもだえる個人の意識と思想体系を総体的に描き出した。このアクロバティックな連結は読みどころのひとつである。同様に真淵においても、「妻の死の前に佇立し、『万葉集』中の人麻呂挽歌に「身もふるはる、ばかり」の感動を覚える「江戸の市隠・賀茂真淵」が、日本の「古へ」の中に「直さ」を見出すことによって、「一人の人の内面として統一を保」(二三二頁)つことができた指摘し、真淵の内面と「直し」という「真淵の思想的鍵語」(二三三頁)を結び付けている。著者持前の繊細な精神によって、こうして徠学派と真淵の姿が浮かび上がってきた。本書は、新しい近世日本思想史の研究者が着実に育っていることを確信させる作品である。

(愛知教育大学特別教授)

曾根原理著

『徳川時代の異端的宗教 ——戸隠山別当乗因の挑戦と挫折』

(岩田書院・二〇一八年)

林 淳

著者は、徳川家康神格化という新分野を開いたバイオニアとして知られ、近世の思想史、宗教史の領域で幅広く活躍する研究者であることは、いまさら贅言を要しない。本書は、著者が長い間に書きためた戸隠山の勤修寺別当乗因についての論文を集めた論集である。乗因の著作の多くは、秘伝書、縁起、血脈系図、教学の書などで占められ、これらの難解なテキストを読み解くのは容易な作業ではないことは十分に想像される。天台真言の経論、中世の神道書、縁起、修験道章疏などの幅広い知識がなくては、テキストを的確に分析し、テキストから意味を汲み取るとは至難の業である。通常は、近世の思想家の群のなかで席をもたない乗因が、本書によって陽の目を見て、彼の思想的な核心が解明されたことは、近世思想史の幅を広げることに貢献しよう。かつて近世思想史は、著作集のある儒学者や国学者が活躍する時代と考えられていた頃もあったが、そうした考え方はもう終わったようである。思想史学は隣接分野に越境し、越境することによって変貌と相互交渉を重ねていき、現

代の人文文学としての資格を得ている。著者は、越境を始めた第一世代に属すると思われる。本書は、越境経験の報告書として読むことができる。本書の概要をたどり、その後で評者のコメントを書き加えたい。

序章では著者は、乗因の〈ねじれ〉を語っている。乗因は処罰されて遠島になったが、本人は正統意識があったことが指摘される。停滞と閉塞を感じる現代の状況は、体制と〈ねじれ〉の位置にあった乗因への関心呼び起こす可能性があるという。

第一章「山王一実神道の展開」では、天海流の山王一実神道から〈逸脱〉し、道教的思想を取り込んだことが乗因の異端性だという通説を検討する。著者によれば、慈悲にもとづき神・仏・道・修験の四教を広める聖者が秩序を作るという世界観が乗因にはあった。それは天台の一心三觀につながる。徳川家康は聖者であり、転輪聖王だという認識が乗因にあった。通説とは逆に、乗因は山王一実神道からの〈逸脱〉ではなく、天海流の継承者であった。天台教団の方が変化したために、天海流の乗因は異端と見なされたと著者は分析する。ここに乗因と天台教団との間で逆転があったとする視点は説得的である。

第二章「乗因の神道説の異端的性格」では、乗因が戸隠修験を受容し『大成教』の口伝主義を受け継いだことによって、近世の天台教団の秩序とは相対立することになったことが論じられている。天台宗教団では近世前期から中期にかけて灌頂を法曼一流に統一する動きがあった。戸隠修験では峯中灌頂が行わ

れ、修行と口決が重んじられたが、法曼流を頂く本山と戸隠山とは対立する方向性をもった。「修行の場戸隠山を過度に聖域視することは、本山寛永寺への服従を否定しかねない」とも指摘される。『大成経』の影響を受けた他の人物と同様に諸教一致論、徳川体制擁護、心一元論が乗因にも見られた。学問・修行・儀軌などを定めて秩序を確立した〈正統(教団公認)〉と、乗因の思想のように心に絶対的な価値をみる〈異端〉との対立があった。〈異端〉乗因は、〈正統〉天台教団に従わなかった点で、紛れもなく〈異端〉天海の後継者である」と著者はまとめる。しかし天海も〈異端〉だということによって、異端の概念は広がりすぎるのではないか。

第三章「即伝と乗因」は、中世彦山の即伝の教学が戸隠に伝来して、乗因も即伝の修験一実の教学を受容したことを明らかにしている。即伝の教学には、「自分自身が仏」、「自然界の諸現象それ自体が仏教の真理と一体」、修験一実論、山中聖域論があった。山王一実神道が即伝の修験一実論に影響したと捉えられ、さらにその影響が乗因に及んだと見ることができ。乗因の立脚点が山王神道から即伝流修験へ変化した。一実の重視という〈戸隠修験の伝統〉がもう一つの選択肢を乗因に与えて、寛永寺教団と対立するのを後押しした」と想定され、そこに「中世的修験と近世的修験の相違と対立」がある。彦山から戸隠山へ即伝の教学が伝播したという事実は、修験の一派組織間にヨコのネットワークが存在したことを予想させて、それが

寛永寺を頂く天台教団にあるタテの本末関係を相対化する契機になったと評者は理解したい。

第四章「戸隠山別当乗因の弟子たち」は、元文三年（一七三八）の寺社奉行における乗因の取調べと処罰、その後の弟子たちの動向を扱っている。乗因は、輪王寺門跡の呼び出しには応じず、寺社奉行が呼び出し取調べを行うという異例な事態になった。衆徒が乗因を出訴した折にも乗因に従った六人の衆徒がいた。彼らは、乗因のもとで山内運営を行った。乗因処罰後に彼らは詫言を書き、一山に復帰した。事件後に乗因に関する資料は焼却され、彼の痕跡は消し去られた。ところで妙高山麓の関山権現社の祭礼は、戸隠山の修験者が招かれて柱松などを行ってきたが、享保年間末頃から戸隠山修験者が来なくなり、地元の子が「仮山伏」として山伏役を務めざるをえなかった。このことについて著者は、乗因問題で戸隠山が混乱し、修験者派遣を停止したためだと推定するが、鋭い指摘である。政治的な事件が地域の民俗を変更させる興味ぶかい事例である。

第五章「乗因と靈空」では、日本で造形された魔多羅神を擁護した乗因と、魔多羅神を排除した靈空が検討される。それは伝統的な口伝主義と、それを否定する立場の対立でもあった。靈空が説く安楽律は天台教団の正統教学となり、乗因は排斥される運命であった。魔多羅神が、正統派と異端派との根本的な論点の相違となった。魔多羅神は弾圧されたが、ところが天台

教団の首脳の中に魔多羅神信仰が続き、国家を守護する行疫神

として理解する著述が書かれた。妙法院においても魔多羅神信仰は続き、それは中世天台の玄旨帰命壇・魔多羅神の伝統教学を引き継いでいた。さまざまな魔多羅神信仰があるなかで、著者は、寛永寺による魔多羅神の国家管理があったと結論づける。しかし妙法院の事例をふくめて多元的な魔多羅神の並存状況がある以上、はたして正統／異端の二分法が成立していたかどうかは疑問になる。

補論「日光三所権現と東照三社権現」は、中世日光にあった祭神が近世にどのように変化したのかを論じる。家康を日光に祀るにあたって、山王権現、魔多羅神を合わせて祀った。そして魔多羅神が日光権現と呼ばれるようになった。鶏足山覚深『瀧尾権現靈託記』によれば、日光三所権現は崇りをなし調伏される対象であった。そこには中世的な日光三所権現が、近世に被った変化を窺うことができる。

第六章「靈宗神道説の広がり」は、乗因の「靈宗」という語を検討する。この語の由来は、吉田兼俱『唯一神道名法要集』にあり、その後『大成経』にも使われる。そこでは、宗源、斎元、靈宗の三種の神道が提示されている。この三種の神道説には禅宗系と天台系があって、乗因は天台系に属した。乗因以降の展開をみると、『大成経』の影響をうけた人物として偏無為が挙げられる。著者は、乗因、偏無為の思想研究の必要性を説く。

以上、本書の内容をたどってきた。著者は論を立てることに

急ぐことはなく、テキストの原文を引用し、慎重に分析し、その内容を確定した上で議論を進めていく。テキストを博捜し、テキストを読むことにおいて思想史学の基礎となる文献学的なトレーニングがよく生かされているといえよう。それだけでなく、独自の大きな見通しが本書に貫かれている。それは、近世の天台教団が国家権力とのつながりにおいて変化し、中世的な口伝主義から脱却しようとしたが、乗因のような中世的な口伝主義を保持する立場は、変化を遂げた正統派から異端視されていくという見通しである。この見通しが、本書の各章の底流に流れている。

つぎに評者の疑問を提示したいと思う。「異端的宗教」「異端」という言葉が頻繁に出てくるが、評者にはよく理解できなかった。三点にわけて疑問点を述べておく。

第一に、この時期の天台教団において正統と異端の制度が明確にあったかどうか。権威ある教学が正統として形成されたとしても、排他性の度合いが低ければ、異なる教学の並存が容認され、そこには異端現象は存在しない。著者は、天台教団では並存が容認された時期から正統教学が形成された時期への移行が、近世前期・中期にあったと考えているようである。正統教学の排他性が強いのであれば、乗因以外にも異端がつぎつぎと輩出されたはずである。乗因一人が異端かどうかという点よりも、正統と異端の制度が確立していたかどうかが究明の主題になってもよかった。

第二に、乗因は、誰によって「異端」とされたのか。衆徒は、戸隠山内での乗因の強権的な政治手法を非道だとして輪王寺門跡主に訴え、乗因の前例の無視などを問題視したが、彼の思想内容を問題視したわけではあるまい。山中聖域論、修験一実論、「自然界に仏教の真理を見る」、「修行による成仏」の点などは、出訴した衆徒にも共有されていた可能性は大きい。寺社奉行に召還された乗因は、輪王寺門跡の支配を認めず、門跡からの呼び出しにも応じなかった。門跡は別当の交代を決断し、乗因の取調べと処分は寺社奉行に任せた。乗因が江戸に着いて十日後に寺社奉行は乗因の有罪を決定した。寺社奉行は、乗因の尊大な態度に手を焼いたと想像されるが、彼の著作を吟味したわけではなかった。輪王寺門跡の権威に服さない乗因の頑強な態度と山内での混乱が、処罰の原因だったと評者を見る。尊大な態度は、戸隠山における強権的な独裁者であったことと表裏一体であった。著者であれば、乗因が門跡の権威を認めない一点をも異端的思想の真骨頂と見るかもしれない。しかし思想内容、尊大な態度とは別な次元の話であろう。寺社奉行が下した処罰は、思想の内実を精査した上で為されたのではなく、山内での強権的な政治手法と門跡の権威を無視した尊大さに向けて為された。評者が知りたいことは、天台教団が乗因の著作を仔細に検討した調査と異端審問を行ったかどうかという点である。本書を読む限り、そのような調査や異端審問が行われた記載は見当たらなかった。誰が乗因を「異端」と認定したのが、明瞭

に答えられていないように評者には思われる。

第三に、乗因の転輪聖王の論は、幕府の政治体制を擁護し、幕府の秩序への従順を求めるものであった。本書の記述を読む限り、国家権力にとって乗因の思想は体制を揺るがす異端であったとは考えにくい。

以上、筆者の異端説への疑問点を挙げてみた。乗因が勧修院別当にならなければ、出訴にいたる事件もなかったはずである。別当職の有した権限の大きさが、事件の鍵になる。中世の顕密系の寺社において一山組織が形成されたが、それが中世末に滅ばされたこともあったが、残ったこともあった。彦山、戸隠山、羽黒山は、近世に残った一山組織の代表である。それぞれ寛永寺の末寺となったが、一山組織には中世以来の自治や修行方法や口伝主義が続き、山内に独自の権力の仕組みがあった。寛永寺と一山組織の関係は、本末関係とはいえ、宗派が持っていた本末関係とは違っていた。寛永寺と一山組織との葛藤に満ちた関係は、これまで十分に追究されてはこなかった。そうした研究状況に照らして天台教団における一山組織の問題をとりあげて、思想史的な観点から解明し、国家権力と宗教の関係を問い直した本書は、先駆的な労作である。

修験道研究と思想史学とが遭遇することは、これまでなかったし、これからもないであろう。その意味では本書は、多方面の分野に越境し、各分野の成果を柔軟に吸収して独自の学風を築いた著者ならではの奇跡の著作である。越境を企てようとす

る人は多いが、越境先の分野から評価を得て帰還できた人はごく稀である。仄聞するところによると、二〇一九年度の日本山岳修験学会賞が本書に与えられたという。近世修験道というと、本山派、当山派、大衆的富士講・御嶽講などがまず研究対象として念頭に浮かぶが、戸隠山という一山組織を扱った本書が受賞したことの意義は、小さくはないと思われる。近世の一山組織における「中世的なもの」の探求という未到の研究領域の扉が、本書によって静かに開かれた。曾根原流の越境の流儀が奇跡の著作を生み出したのである。

(愛知学院大学教授)